

でも読み継がれています。明治維新で活躍した山岡鉄舟も愛読していたと言われています。

『天狗藝術論』は『田舎莊子』刊行の約2年後、享保14(1729)年に刊行された談義本です。「芸術」といつてもそれは「武芸・心術」を意味する言葉で、武道における

「ざんしん残心」や「せん先」など、武術の精神面の問題をメインテーマに扱い、現在でも武術書として高い評価を受けています。

樗山は、享保16(1731)年、73歳の冬に、仕事を退官して隠居し、余生は著述に明け暮れました。ほかにも、『かはくせいあふんだん河伯井蛙文談』、『再

丹羽家に脈々と受け継がれた

佚斎樗山の言葉

私は、丹羽家の13代目にあたります。父が亡くなった時、母親から「大切なものだから」と渡されたのが『家訓略』と『略譜』の2冊です。

丹羽家に残されたのは、この2冊だけです。というのも、10代目が幕末の上野戦争(現在の東京都上野公園内)で旧幕府軍として戦ったからで



丹羽 芳雄さん(70)

す。関宿藩を脱藩してまで徳川家へのいちずな忠節を貫いたようですが、戦死したので、残された家族は大変苦労したと思います。丹羽家が途絶えなかったのは、

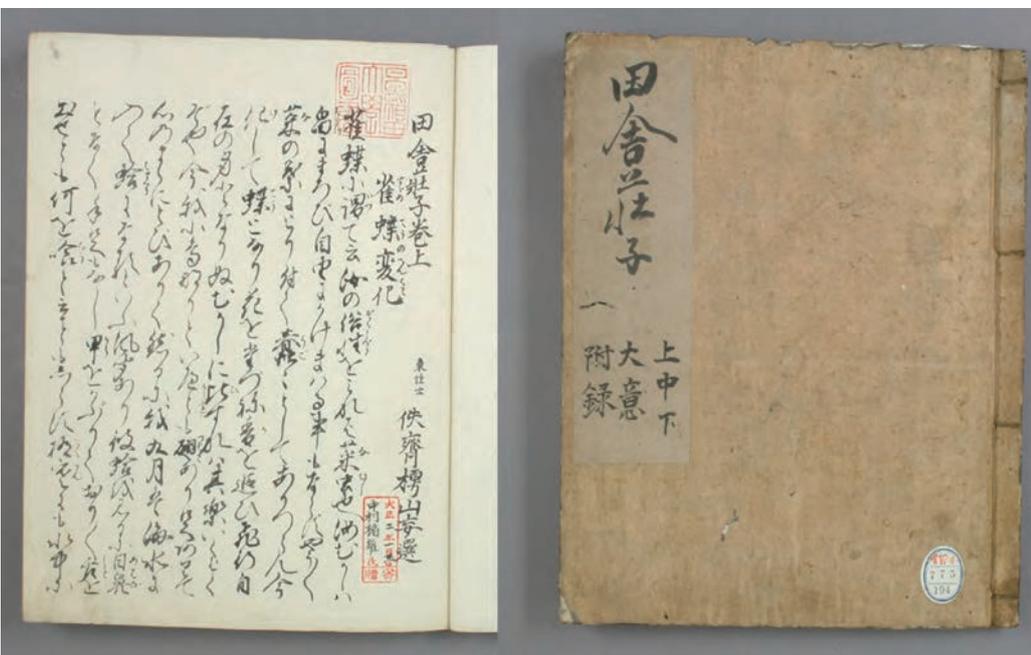
隠居していた9代目が母と幼子3人を連れて九州へ逃れたからです。この2冊には深い歴史があります。家訓略は、3代目の佚斎樗山が子孫に書き残したもので、著作物に書かれている内容とほぼ一緒です。私が幼いころ、祖母からも武士として、ものに執着しない生き方をよく聞かされました。私も自分の子ども達に丹羽家の歴史をしつかり受け継いでいきたいですね。

来田舎一休』、『六道士会録』、『英雄軍談』(のちに『奇談戯草』と改題)、『地藏清談漆刷毛』(『雑篇田舎莊子』とも言われている)が刊行されており、「樗山七部の書」と言われています。

これらは、江戸における新しい知的な文芸の口火を切ったもので、特に『莊子』に用いられた表現方法を駆使した明確な方法意識は、以後の談義本を初めとする寓意小説の流れを開く端緒となりました。

樗山は寛保元(1741)年、関宿の地で天寿を全うしました。享年83歳でした。関宿台町の宗英寺に葬られています。

【参考文献】飯倉洋(校訂)『叢書江戸文庫13佚斎樗山集』国書刊行会／中野三敏(校注)『新日本古典文学大系81田舎莊子当世下手談義当世穴さがし』岩波書店／中村正巳(武術家佚斎樗山の天狗芸術論と田舎莊子猫之妙術について(研究報告第19号))千



早稲田大学図書館所蔵の『田舎莊子』